



松尾寺



成相寺

丹後
中世寺院の
実態

日本海を
めぐる文物

令和 3 年 6 月 26 日 (土)

舞鶴市西公民館

報告 1 「舞鶴市満願寺跡の発掘調査 - 中世寺院と貿易 -」

まんがんじ
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
竹村 亮仁

報告 2 「舞鶴市松尾寺仁王門の発掘調査成果」

まつのおでら
舞鶴市文化振興課
松崎 健太 氏

報告 3 「宮津市成相寺と丹後の中世寺院」

なりあいじ
宮津市教育委員会
河森 一浩 氏

舞鶴市満願寺跡の発掘調査

—中世寺院と貿易—

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

竹村 亮仁

1. はじめに

「まんがんじ」と聞いて何を最初に思い描きますか？

多くの方が京野菜の万願寺とうがらしを想像するのではないのでしょうか。

お寺の名前は、「満」願寺、地域の名前は「万」願寺と区別されています。お寺の名前は願主である、弁円上人の願いが満るように、そして、地域の名前は、万人の願いが満ちるようにと付けられたと伝わっています。^(注1) 現在では十一面観音菩薩座像(舞鶴市指定文化財)を本尊とする江戸時代に再建された観音堂と庫裏が残っています(写真1)。十一面観音菩薩座像の膝の裏には墨で「建保六年(中略)造立」と銘されており、創建が鎌倉時代前期、建保年間(1213~1219)であることを示しています。

今回は、発掘調査で見つかった満願寺跡に関連する建物や出土した遺物などから、当時の満願寺の姿や国内外との交易などについて紹介したいと思います。

2. 中世満願寺跡の発見

今回、発掘調査を行ったのは、現在の満願寺から北東約250mに位置する小さな谷筋です(写真2)。調査地は、かなり地形が改変されていたため、満願寺跡に関連する遺構は、あまり残っていないと考えられていました。しかし、調査を進めていくと、平安時代の終わりから室町時代ごろまでの建物跡などが残っていることがわかりました。小さな谷筋のなかに、南北約18m、東西約20mの限られた範囲で礎石建物や石組溝などが見つかりました(第2図)。また、この限られた範囲の中から貿易陶磁器や土師器、常滑焼など500点を超える遺物が見つかりました。

礎石建物や石組溝は、谷の斜面を削って、平坦面を造成してつくられています。平安時代終わりから鎌倉時代初頭に建てられた礎石建物①では、礎石は元の位置を保っていると考えられます(第3図・写真3)。そこから復元できる建物の規模は、南北4.9m以上、東

西11m以上の大きさになります。柱間はおおむね4尺(約1.2m)を測ります。焼けた土等が見つかっていることから、火災によって焼失したものと考えられます。礎石建物①が火災によって焼失した後に、地面を整地して、新たに礎石建物②と礎石建物③、石組溝がつけられます(第4・6図・写真4～6)。礎石建物②は、40石程度の礎石がのこり、南北3m以上、東西9mの建物に復元することができます。また、柱間はおおむね4尺(約1.2m)を測ります。礎石建物②の南約1mで見つかった礎石建物③は南北3.4m以上、東西6m以上の大きさになります。2棟の建物は、少し柱筋が異なることから、別々の建物で、狭い空間に、同時期に建っていたと考えられます。室町時代ごろと考えられる礎石建物④は、礎石建物②・③に比べると規模が小さくなります(第5図・写真7)。礎石建物②・③と建物④の間^{すいたい}にどのくらいの時間差があるのかわかりませんが、この頃から中世満願寺は衰退し始めたのかもしれない。

3. 中世満願寺の姿

2で紹介したように、満願寺跡の発掘調査では、建物跡等が見つかりました。これらをもとに当時の満願寺の姿を考えてみたいと思います。

(1) 見つかった建物跡の正体とは

見つかった建物は以下のようにまとめることができます。

礎石建物①(平安時代～鎌倉時代初頭)

- ・ 南北4.9m以上、東西11m以上の建物
- ・ 見つかった状況から礎石が原位置を保っている
- ・ 柱間寸法は、おおむね4尺が基準の建物である

礎石建物②・③(鎌倉時代)

- ・ 礎石建物②は南北3m以上、東西9m／礎石建物③は南北3.4m以上、東西6m以上
- ・ 狭い谷筋に建物が併存
- ・ 石組溝が造られる
- ・ 六器^{ろつき}や華瓶^{けびょう}のような土器製の簡易仏具がある

礎石建物④(室町時代)

- ・ 規模が小さく、南北4m以上、東西5m

礎石建物①～③と礎石建物④は、建物の大きさから、建物の性格が異なると想定されます。礎石建物④は江戸時代に再建された現在の観音堂と大きさがよく似ています。このことから、本尊を収める仏堂的な性格の建物と考えることができるでしょう。では礎石建物①～③はどのような性格の建物だったのでしょうか。

礎石建物①から出土した遺物は土師器皿・貿易陶磁器などが中心で、仏具などが見られないということが指摘できます。このことから、満願寺の僧が生活していた空間、僧坊そうぼうだった可能性があります。

一方、礎石建物②・③は、少しその性格が異なっていたと思われます。その理由として礎石建物①の時期では、白磁壺はくじつぼや黒釉壺こくゆうつぼなど嗜好品しこうひんとしての性格を持つ貿易陶磁器が出土しているのに対して、礎石建物②・③の時期では、出土遺物に使用した痕跡が強く残るとともに、簡易的な仏具(六器(写真9)、華瓶か、)が見つまっていることから、生活空間としてだけでなく、修行などを行う場であった可能性も考えられます。^(注2)

(2) 寺院の広がりを考える

今回見つかった礎石建物などは、僧がおもに生活していた施設の可能性が考えられます。では、寺院の広がりはどのように考えることができるでしょうか。

調査地周辺の地域に残る字名から考えてみましょう(第7図^(注3))。これを見ると、今回の調査地付近には、「上ノ坊」、「西ノ坊」「フトエ(フ動へ)」などの字名があることがわかります。「坊」や「不動」という言葉から寺院に関する施設が存在したことがうかがえます。これらの字名が残る範囲に中世満願寺が広がっていたと考えられます。また、昭和36(1961)年の万願寺川の河川改修時に、山門の礎石と推測される石材が見つまっていることから、現在の万願寺地区の中心を通る道路が参道と考えられます。

4. 満願寺と貿易

(1) 運ばれた東播系須恵器、東海系土器、そして京を意識した土師器皿

出土した遺物には東播磨地域や、東海地域で焼かれた製品があります(第8図及び附表)。東海地域の製品は、常滑焼とこなめやき、古瀬戸こせとと呼ばれるものです。つくられたのは12世紀後半から13世紀中ごろが中心です。これらの製品は、満願寺跡の周辺では、由良川沿いの大川遺跡でも見つまっていることから、舞鶴地域と東海地域や東播磨地域との間で陶器や土器などの移動があったことが分かります。^(注4)また、多量に出土した土師器皿は、京都府北部に一般的な回転糸切り技法から手づくね技法に変化しており、中には京の土師器皿を意識していたようなものも見られます。

(2) 青い器、白い壺、黒い壺はどこから？

今回の調査では、龍泉窯青磁碗りゅうせんようせいじわんや福建省諸窯白磁四耳壺はくじしじこ(写真10)、河北省磁州窯黒釉じしゅうようこくゆう白堆線文壺はくたいせんもんつぼ(写真11)など、約40点の貿易陶磁器が出土しています(第9図及び附表)。京都府北部では、破片点数ですが、福知山市大内城跡で約1,300点、舞鶴市大川遺跡では1,063点、宮津市中野遺跡周辺で400点以上の貿易陶磁器が出土しています。^(注5)出土した土器の総数が

異なることや大内城跡は城跡、大川遺跡は集落遺跡、満願寺跡は寺院跡と、遺跡の性格が違う点は考慮しなければなりません。嗜好品と考えられる壺類の出土比率をみると、大内城跡や大川遺跡は全体の3%程度です。これに対して満願寺跡では全体の17%程度が壺類で、満願寺跡が多く壺類を持っていたことがわかります。同じ寺院跡として比較できる遺跡としては、福井県勝山市白山平泉寺旧境内^{はくさんへいせんじ}があります。ここでは878点の貿易陶磁器が出土しており、そのうちの11%が壺類とされています^(注6)。これも、総出土点数が異なりますが、満願寺跡の割合と類似している点は注目できます。

次に、満願寺跡に貿易陶磁器が持ち込まれた12世紀前後の貿易経路をみていきます(第10・11図)。第10図によると、多くは博多を経由して日本各地へ搬入されていることがわかります。また、李朝朝鮮で刊行された『海東諸国記』(1471年刊行)に「日本国之図」というものがあります(写真12)^(注7)。これには、15世紀ごろの貿易経路が描かれています。よくみると丹後半島と思われる地形の西側に「大河」と書かれており、これは兵庫県円山川とみられます。その後の経路は、経ヶ岬を越えて丹後半島の付け根付近まで描かれており、着岸地点は宮津市周辺ではないかと考えられます。先にも記したように宮津市中野遺跡周辺では400点以上の貿易陶磁器が見つっています。出土点数と絵図から拠点的な性格を持っていたと考えられます。

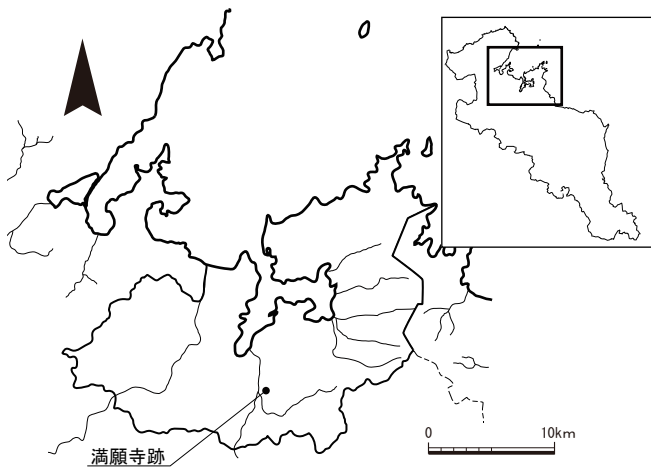
宮津市付近に至った航路は、さらに東へ向かっては描かれていませんが、栗田半島を越えて、由良川の河口にたどり着くと考えられます。多くの貿易陶磁器が見つっている大川遺跡ですが、河口から約8km離れていることから、津というよりも、1つの交易拠点として機能していた可能性が指摘されています^(注8)。満願寺跡への搬入経路の詳細はわかっていませんが、八雲から上福井に抜けるルート(第11図a)や真壁から西舞鶴へ抜けるルート(第11図b)、そして舞鶴湾へ船が入るルート(第11図c)などが考えられます。大川遺跡で見つっていない白磁四耳壺や黒釉白堆線文壺が満願寺跡では見ついていることから、大川遺跡を経由していた可能性は低いと思われます。また、白山平泉寺旧境内(福井県勝山市)、木崎遺跡(同小浜市)、鐘島遺跡(同福井市)などで良好な貿易陶磁器が出土していることがわかっています^(注9)。福井県でも貿易陶磁器が多数見つかることは、海を使った貿易が行われた可能性が十分にあり、由良川河口を越えて福井県方面に向かう貿易船が、その途中に舞鶴湾に立ち寄っていたのではないのでしょうか。

4. おわりに

満願寺跡の発掘調査成果から、中世満願寺の姿や日本海沿岸域の貿易ルートについて考えてみました。発掘調査の範囲が寺院の一部であることや沿岸域での調査が少ないことか

ら推測を重ねた話になってしまいました。しかし、満願寺跡で見つかった陶磁器をみると、国内だけではなく、国外とも、交易をしていた様子をうかがうことができます。今回見つかった遺構や遺物は、満願寺や西舞鶴地域の歴史を考える上で重要な資料であるとともに、日本海沿岸域における当時の交易を考える上でも重要な成果と考えられます。

- 注1 記念誌編さん委員会2018『満願寺創建八百年記念 西紫雲山満願寺 十一面観音菩薩像－八百年の歴史－』（宗）満願寺
- 注2 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2020「満願寺跡第2次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第181冊）
- 注3 注1に同じ
- 注4 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2016「大川遺跡」（『京都府遺跡調査報告集』第164冊）
- 注5 綾部侑真ほか2017「日本海沿岸出土の貿易陶磁器」（『京都府埋蔵文化財情報』第131号）
- 注6 伊野近富2018「京都府北部中世前期の土器・陶磁器 一流通の中継地点と荘園館一」（『中近世陶磁器の考古学』第8巻）
- 注7 申叔舟「海東諸国記」（『朝鮮史料叢刊』第2）
- 注8 注6に同じ
- 注9 阿部来2016「中世前期における越前若狭の輸入陶磁器」（『石川県埋蔵文化財情報』第35号）



第1図 満願寺跡位置図



写真1 現在の満願寺



写真2 調査区周辺全景(南から)



写真3 礎石建物①(南から・平安末～鎌倉初)



写真4 礎石建物②(南から・鎌倉)



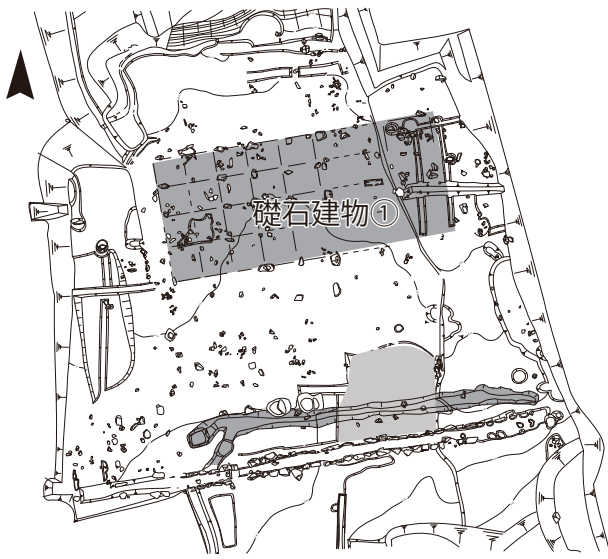
写真5 礎石建物③(南東から・鎌倉)



写真6 石組溝(北西から・鎌倉)



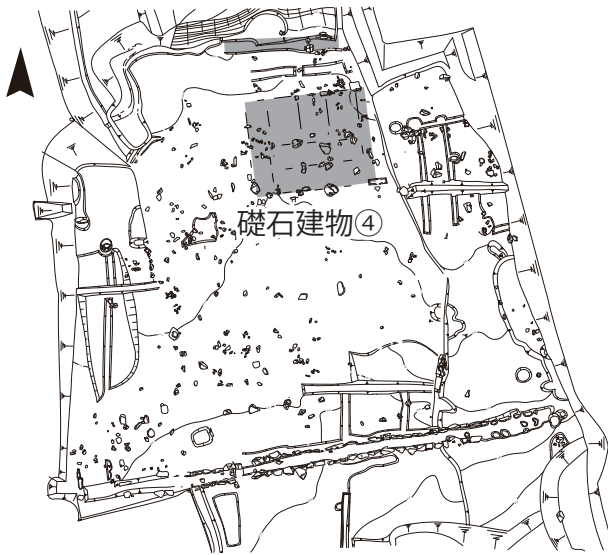
写真7 礎石建物④(南から・室町)



平安時代末～鎌倉時代初頭遺構面



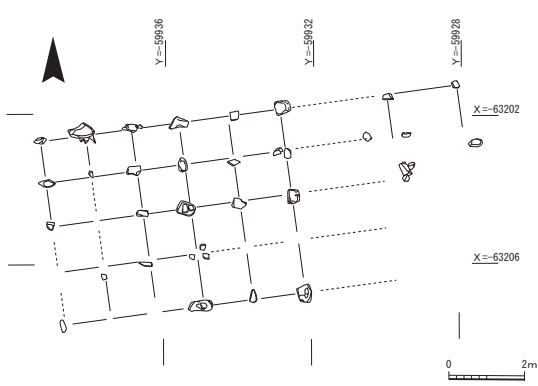
鎌倉時代前半遺構面



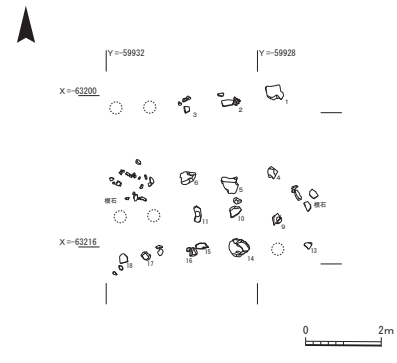
室町時代遺構面



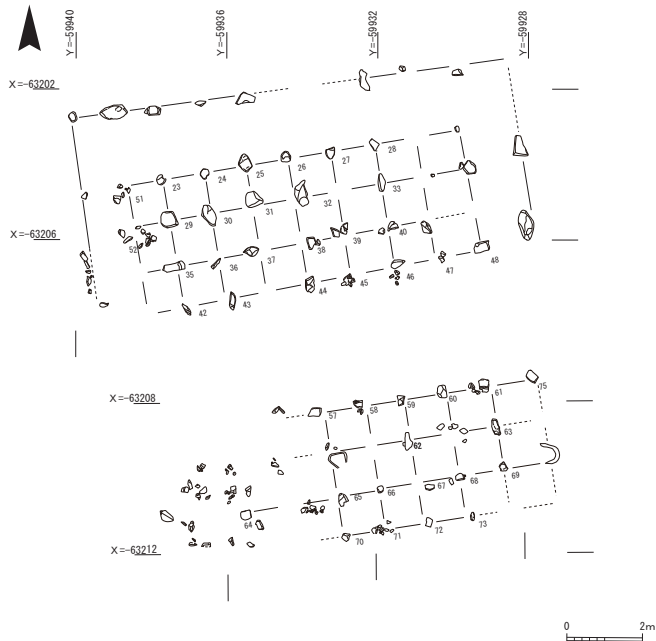
第2図 満願寺跡遺構変遷図



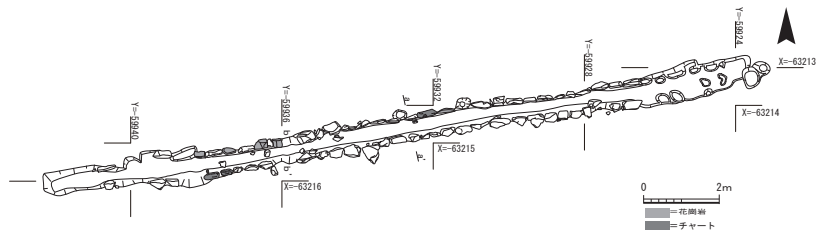
第3図 礎石建物①



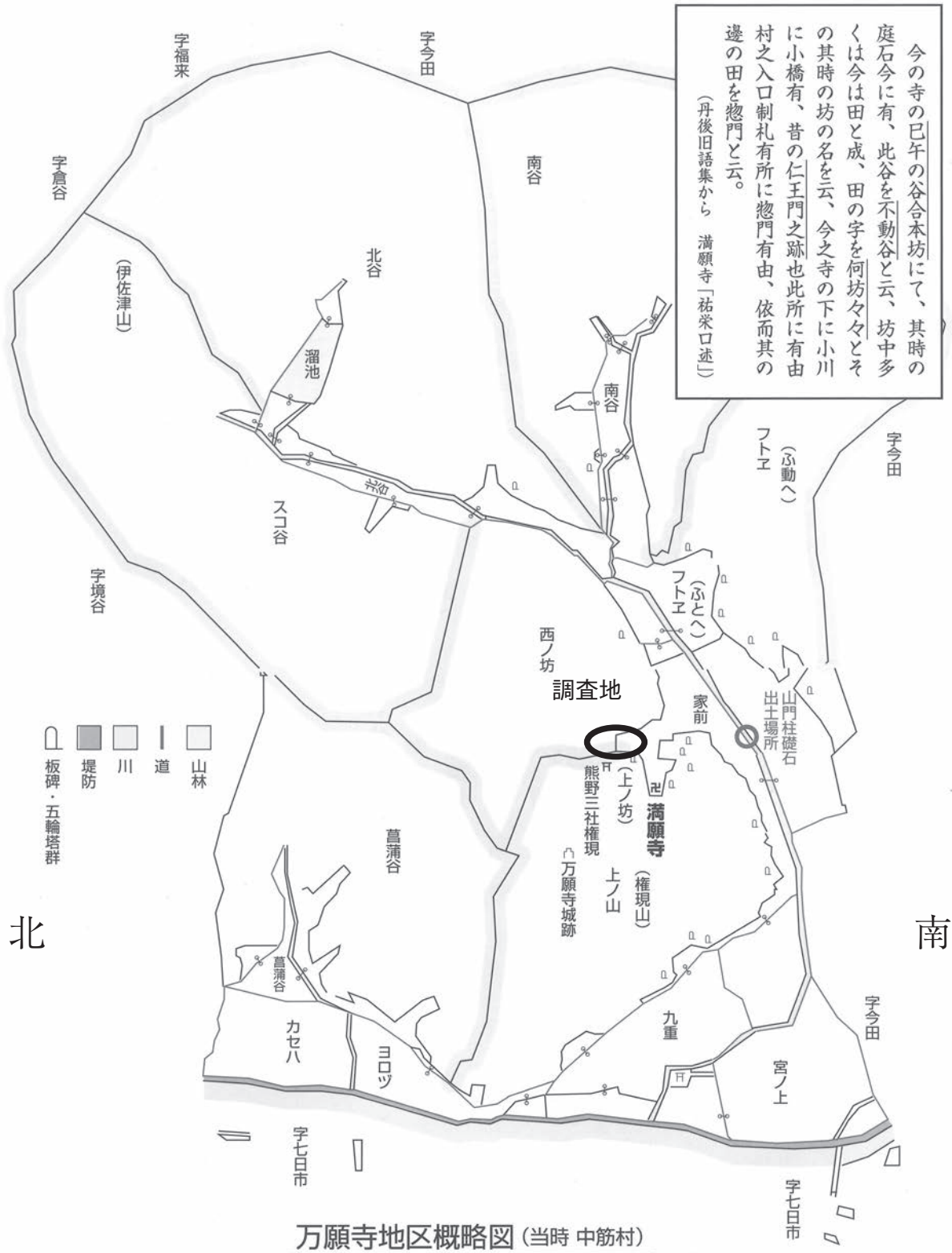
第5図 礎石建物④



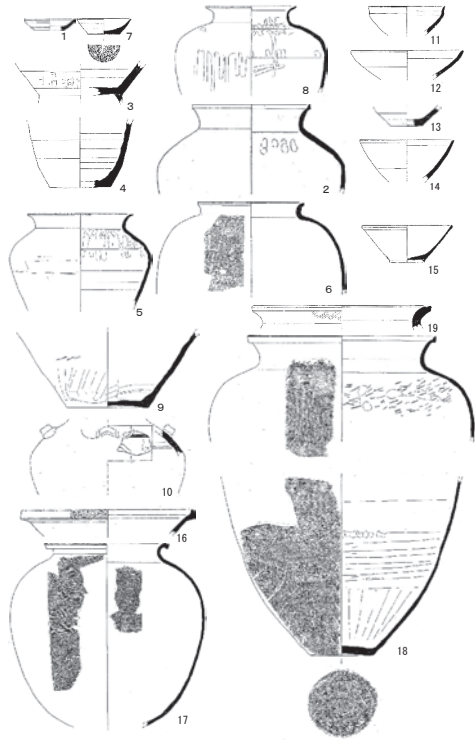
第4図 礎石建物②・③



第6図 石組溝

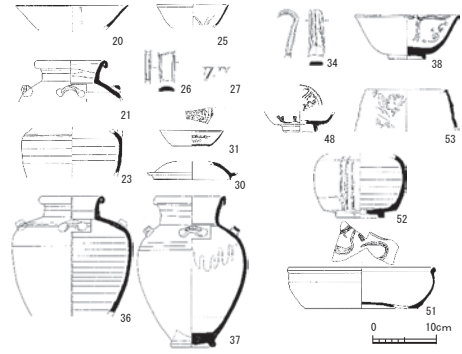


第7図 満願寺周辺字名図(出典：注1文献、一部加筆)



第8図 満願寺跡出土国内産陶磁器
2・6・8・17・18：1/20、その他：1/16

	器形	生産地	遺構・層位
1	山茶碗	尾張	土坑 SK28
2	甕	常滑	SK51
3	捏鉢底部	常滑系	第21層
4	甕	常滑	第21層
5	甕	常滑	第21層
6	甕	常滑	第21層
7	山茶碗	尾張	炭化物層
8	甕	常滑	炭化物層
9	鉢	常滑系	炭化物層
10	四耳壺	古瀬戸	第11層上層
11	天目茶碗	古瀬戸	第11層
12	椀	古瀬戸	第20層
13	椀 底部	古瀬戸	第20層
14	平椀	古瀬戸	第21層
15	山茶碗	東美濃	第21層
16	鉢	東播系	第11層上層
-	鉢 口縁	東播系	第21層
17	甕	東播系	第21層
18	大甕	東部山陰系	土坑 2SK51
19	甕	不明	第21層



第9図 満願寺跡出土貿易陶磁器

	器種	器形	生産窯	遺構・層位
20	白磁	輪花椀		礎石建物③
21	白磁	四耳壺		土坑 S X 25
22	白磁	四耳壺		土坑 S X 26
23	白磁	水注		土坑 S X 27
24	白磁	水注		土坑 S X 28
25	白磁	描花文椀	景德鎮	土坑 SK28
26	白磁	水注 把手		土坑 SK28
27	白磁	輪花皿		第11層上層
28	白磁	椀		第11層
29	白磁	椀		第20層
30	白磁	蓋		第21層
31	白磁	皿		第21層
32	白磁	椀		第21層
33	白磁	椀		第21層
34	白磁	水注 把手		第21層
35	白磁	椀		炭化物層
36	白磁	椀		炭化物層
37	白磁	四耳壺		炭化物層
38	白磁	四耳壺		炭化物層
39	青磁	劃花文椀		土坑 S X 25
40	青磁	椀	龍泉窯	第11層上層
41	青磁	椀		第11層上層
42	青磁	椀	龍泉窯	第20層
43	青磁	椀 底部	龍泉窯	第21層
44	青磁	椀		第21層
45	青磁	小椀		炭化物層
46	青磁	椀		炭化物層
47	青磁	皿		第21層
48	青花	椀	福建諸窯	第11層上層
49	褐釉	盤		第21層
50	青白磁	皿	景德鎮	炭化物層
51	鉄絵 白堆 線文	盤	磁竈窯系	炭化物層
52	不明	壺	磁州窯	土坑 SK28
53	不明	香炉		第21層



写真8 満願寺跡出土遺物集合写真



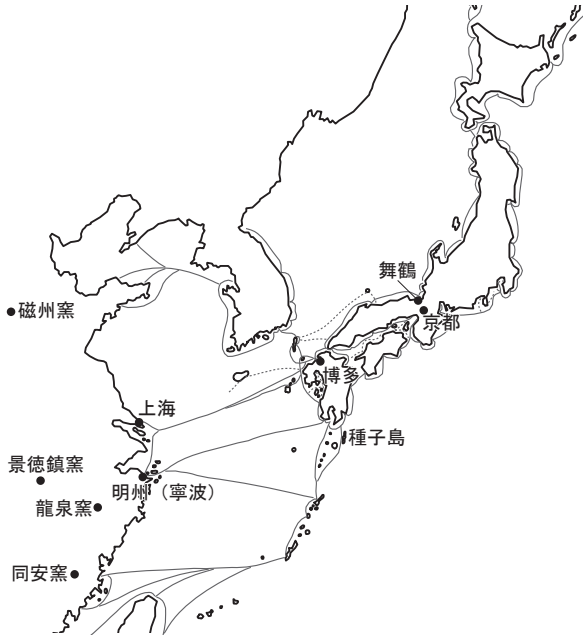
写真9 六器



写真10 福建諸窯 白磁四耳壺



写真11 磁州窯 黒釉白堆線文壺



第10図 日本海交易ルート
(出典：市村高男「中世の航路と港湾」2010を一部改変)

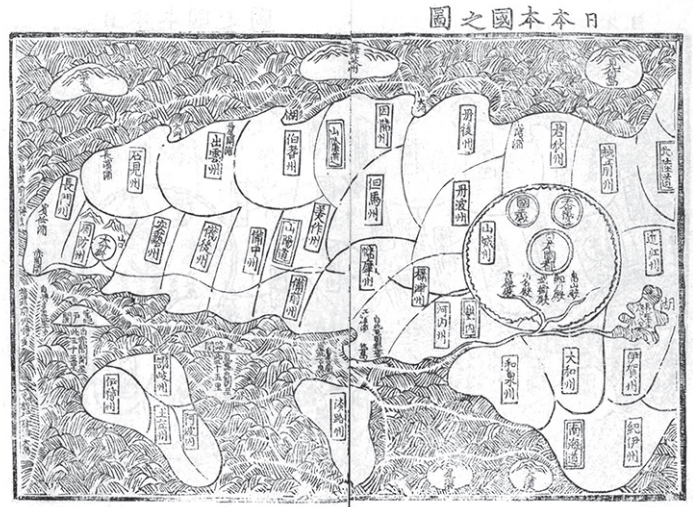
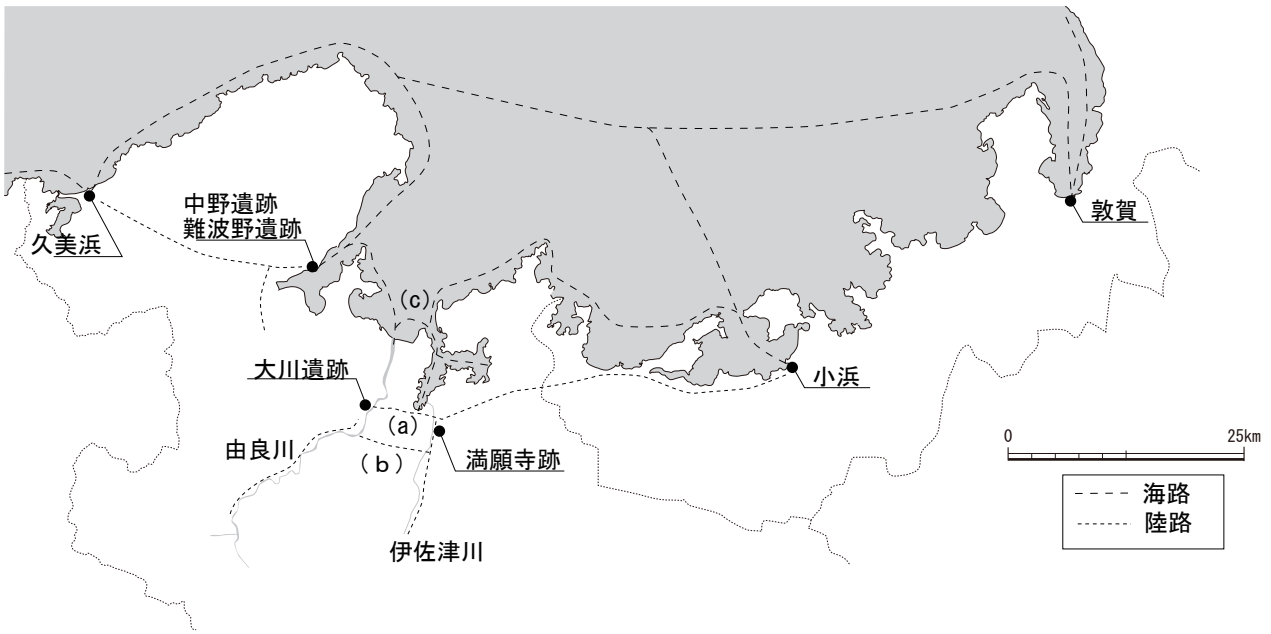


写真12 日本国之本圖(出典：注7文献より)



第11図 日本海交易ルート

まつのおでらにおうもん 舞鶴市松尾寺仁王門の発掘調査成果

舞鶴市文化振興課
松崎健太

1. はじめに

若狭富士とも称される青葉山の中腹に位置し、西国三十三所第二十九番札所として知られる松尾寺は、平安時代の国宝「絹本著色^{ふげんえんめいぞう}普賢延命像」をはじめ、多くの文化財を今に伝えていますが、これまで発掘調査は実施されておらず、考古学的な検証は行われていませんでした。

昨年度、舞鶴市では松尾寺の山門にあたる京都府指定文化財の仁王門の解体修理に伴い、松尾寺遺跡として初めての発掘調査を実施しました。松尾寺の歴史を考える上で貴重な手がかりを得ることができましたので、今回はその成果をご紹介します。

2. 松尾寺の歴史と文化財

鎌倉時代に松尾寺が再興された際の法要で読み上げられた『松尾寺再興啓白文^{けいびやくもん}』（徳治2年(1308)）によれば、奈良時代初期に開山されたこと、平安時代の正暦年間(990~995)に漁師春日為光^{かすがのためみつ}が、海難から観音によって救われた靈験によって馬頭観音像^{ばとうかんのん}を造像して本尊としたこと、平安時代後期に鳥羽天皇(1103~1156)の帰依^{きえ}によって発展したが、建仁元年(1201)に火災に遭い、その後、美福門院(鳥羽天皇の皇后)の支援で再興されたことなどの縁起が記されています。

また、応保元年(1161)に巡礼を行った覚忠^{かくちゅう}の三十三所巡礼記(『寺門高僧記』)には、「十七番。同國加佐郡松尾寺。御堂九間南向。本尊馬頭観音。願主若狭國海人 二人建立之。」とあります。この事から、少なくとも平安時代末頃には寺院として整備され、観音巡礼にも登場するなど、観音霊場として認知されていたことがうかがえます。

松尾寺に伝わる文化財を見てみると、国宝1件、重要文化財5件、国指定重要無形民俗文化財1件、府指定文化財3件、市指定文化財6件など、多くの文化財が伝えられています。中でも国宝の「絹本著色 普賢延命像」は、府北部唯一の国宝絵画であり、平安時代後期の平安仏画の代表作として著名です。その他、快慶作^{かいけい}の「阿弥陀如来坐像」(重要文化財)など、鎌倉時代の文化財が多いことが特徴で、中世にかけて松尾寺が信仰をあつめ

て発展した様子を示しています。

市指定文化財「紙本著色 松尾寺伽藍落慶古式図」(第6図)(以降、参詣曼荼羅さんけいまんだらと呼称)は、参詣曼荼羅の一種で、室町時代末頃の境内とその周辺の様子を描いたものと考えられています。画面中央の本堂を中心に、境内には阿弥陀堂、地藏堂、五重塔、鐘楼しょうろう、中門、山門等が配置され、青葉山山頂には奥の院、門前には門前町が描かれています。多くの巡礼者の姿も見え、中世の松尾寺の様子を知る上で重要です。今回の発掘調査のポイントの一つとして、現在の仁王門の場所と、参詣曼荼羅に描かれている山門の位置関係に注目していました。

中世以降も何度も火災に見舞われていますが、近世には細川氏、京極氏、牧野氏ら歴代領主の帰依を受け、整備や修復が行われ、現在に受け継がれています。

3. 仁王門の発掘調査

府指定文化財の松尾寺仁王門は、明和4年(1767)に建立された三間一戸八脚門さんげんいっこはつきやくもんで、木造金剛力士立像(市指定文化財)一対を安置する松尾寺の山門(写真1、9)です。この木造金剛力士立像は、年輪年代測定の結果から、原木伐採時期が14世紀前半から中頃と推定されており、造像時期についてもそれを大きく下らないと考えられています。また、室町時代後期の境内の姿が描かれていると考えられている参詣曼荼羅(第6図)には、仁王像を収めた山門がみえることから、現仁王門より遡る仁王門の存在が推定できます。今回の松尾寺遺跡初の発掘調査では、現仁王門以前の山門の存在や、古代や中世に遡る境内の様子等、松尾寺の歴史を明らかにすることを目的に調査を実施しました。

4. 調査結果

発掘調査によって確認した遺構・遺物を古い順に紹介します。

時代① 平安時代初頭(9世紀頃) (写真2)

整地層 遺跡の最下層で整地された地面を確認しました。この検出面で出土した須恵器や土師器の年代から、整地層は平安時代初め頃(9世紀頃)のものと考えられます。この頃に寺院として成立していたかどうかは分かりませんが、今回の調査地点ではこの時期に何らかの土地利用が始まっていたことが分かりました。

時代② 平安時代前期～後期 (第2図、写真3・4)

基壇跡 1 a 時代①の整地面の上で、東西に並ぶ石列と平安時代後期にかけての遺物を包含する土層を確認しました。石列の大部分はすでに石材が抜き取られて残っていませんでしたが、石列から南側が盛土で造成され、土壇になっていることが分かりました。この

土壇には建物の礎石抜取り跡と推定される遺構も確認できることから、建物の基壇跡（基壇跡 1 a）と考えられます。基壇の規模は東西方向約9.5mと推定されます。調査区南側（参道崖側）にさらに続いており、南北方向の規模は不明です。現在の仁王門の基壇（東西方向約11m）よりやや小さい規模となります。基壇が造成された詳細な時期は不明ですが、平安時代後期にかけて造成されたと判断しました。

時代③ 鎌倉時代～江戸時代前期（第3図、写真5・6）

整地層（参道跡か） 鎌倉時代から江戸時代前期にかけて、本堂へ続く参道跡と考えられる精緻な整地が少なくとも4回以上繰り返されていることが分かりました。東西の端に落込みや溝状遺構があり、参道脇の排水機能を担っていた可能性があります。調査区北端で石敷きが確認されましたが、参道に伴う近世の石敷きと判断しました。

基壇跡 1 b 調査区南東側で東西方向に続く二条の石列が見つかりました。これは、前時代の基壇跡 1 a を踏襲して改修したもの（基壇跡 1 b）で、基壇の北端を区画する溝として機能していたと考えられます。この石列は西側の大部分がすでに石材が抜き取られ残っていませんでした。地層の堆積状況から中世後期にはすでにこの石列が存在したと推定できます。溝からは江戸時代前期の陶磁器類が出土しており、この時期まで基壇跡 1 b が改修されながら機能していたことが分かりました。

時代④ 江戸時代中期（第4図、写真7・8）

基壇跡 2 a b / 地鎮痕跡 / 旧仁王門 時代③で確認された基壇跡 1 b を区画する石組の溝が廃止され、調査区全面にわたって現在の仁王門の基礎にもなっている新しい基壇 2 a の盛土造成が行われました。この整地層の中で地鎮痕跡とみられる遺物（土師皿2枚、寛永通宝12枚、元禄二朱判金、元禄豆板銀）が一括で出土しました。

また、基壇跡 2 a の地表では現在の仁王門の礎石とは異なる礎石抜取り穴が見つかりましたが、これは現仁王門の前身にあたる旧仁王門の遺構と考えられます。地鎮行為はこの造成の過程で、門の中心軸付近で行われたものであり、旧仁王門の建立に伴う地鎮行為、あるいは先代の基壇跡 1 b に建っていた山門等の鎮めの行為と考えています。発掘調査で金貨・銀貨が埋納された状況で出土することは極めて珍しく、当時の建立に携わった人々の特別な想いが読み取れます。

この時埋納された二朱判金は、元禄10年（1697）に鑄造が開始されたもので、旧仁王門はこれ以降の建立と推定できます。旧仁王門は現仁王門の建立年である明和4年（1767）までに失われたことになり、存続期間は比較的短期間であったことが明らかとなりました。

旧仁王門の礎石抜取り跡は、現仁王門の南北方向の柱通りとほぼ一致していますが、東西方向の柱通りは約3m南にずれています。よって旧仁王門は現仁王門より南側（崖側）に建

っていたと考えられます。

旧仁王門と現仁王門は共有の基壇跡 2 a に建てられています。基壇が北側に一部拡大された痕跡(基壇跡 2 b)が確認できました。建替えの際に門の位置が北側(本堂側)にずらされたことで基壇が拡張された可能性があります。

5. まとめ (第5図、写真9)

今回の調査地点では平安時代初頭(9世紀頃)に整地され、何らかの土地利用が開始されたことが分かりました。松尾寺の創建期の様子を考える上で、古代に遡る遺構・遺物が初めて確認できたことは重要な成果です。

さらに平安時代後期にかけては基壇跡 1 a が造成される等、境内の整備が行われたことが明らかとなりました。鳥羽天皇や美福門院の庇護を受けて平安時代後期に伽藍が整備されたと伝えられていることから、今回確認された基壇跡はこのような平安時代後期の整備の一端を示している可能性があります。

この基壇跡 1 a は改修されながら中世以降も引き継がれ、江戸時代前期頃まで基壇 1 b として機能していたことが確認できました。参詣曼荼羅に描かれた山門は、境内の配置から基壇跡 1 に建っていた可能性が指摘でき、歴代の山門もこの位置に建てられていた可能性が考えられます。その後、基壇跡 1 b は南側が崖崩れ等で失われ、江戸時代中期に本堂寄りに位置をずらして旧仁王門、さらに位置を本堂寄りにずらして現仁王門が建立されたとみられます。

その他、中世から江戸時代にかけては参道跡と推定される精緻な整地が繰り返されていることが確認できました。中世以降盛んになる西国三十三所巡礼による参詣者の増加や歴代領主等の帰依を受けて、松尾寺が再々整備され発展してきた様子をうかがうことができます。

今回の松尾寺の初めての発掘調査では調査地点の一連の変遷を明らかにすることができました。これを契機として、今後の調査研究による更なる松尾寺の歴史の全容解明が期待されます。

【参考文献】

- ・舞鶴市史編さん委員会1975『舞鶴市史 各説編』舞鶴市
- ・京都府教育委員会1989『京都の文化財』(第7集)
- ・舞鶴市史編さん委員会1993『舞鶴市史 通史編(上)』舞鶴市
- ・松尾寺2008『開山千三百年 西国第二十九番札所 松尾寺』



第1図 松尾寺と調査地点の位置



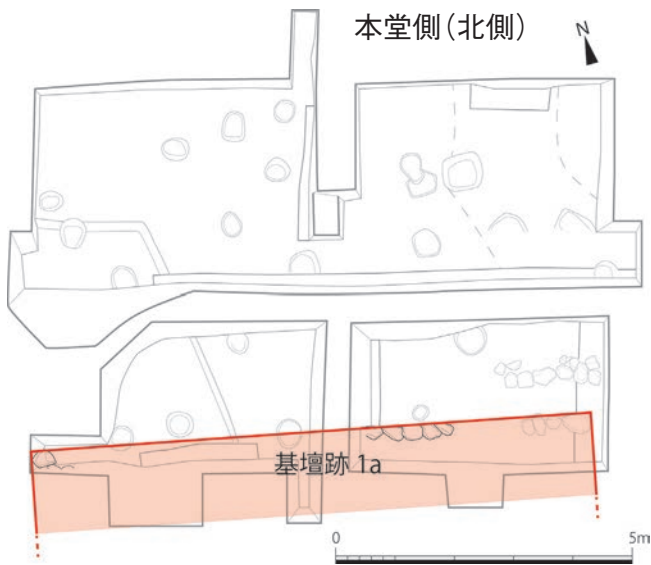
写真1 松尾寺仁王門(南西から)



写真2 時代① 最下層土器出土状況



写真3 時代② 基壇跡1a



第2図 時代② 調査区平面図

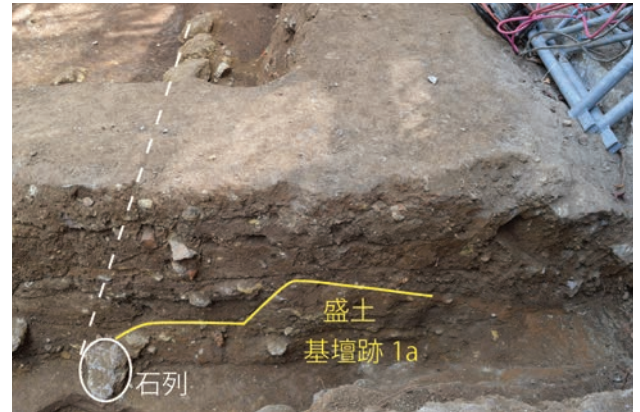
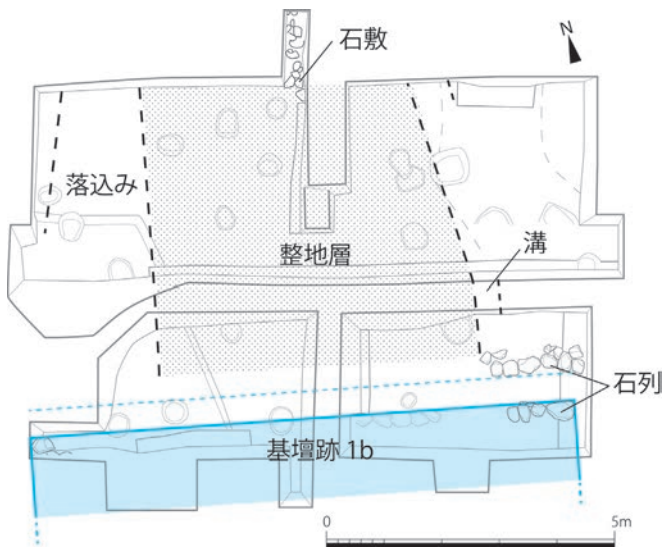


写真4 基壇 1 a 断面



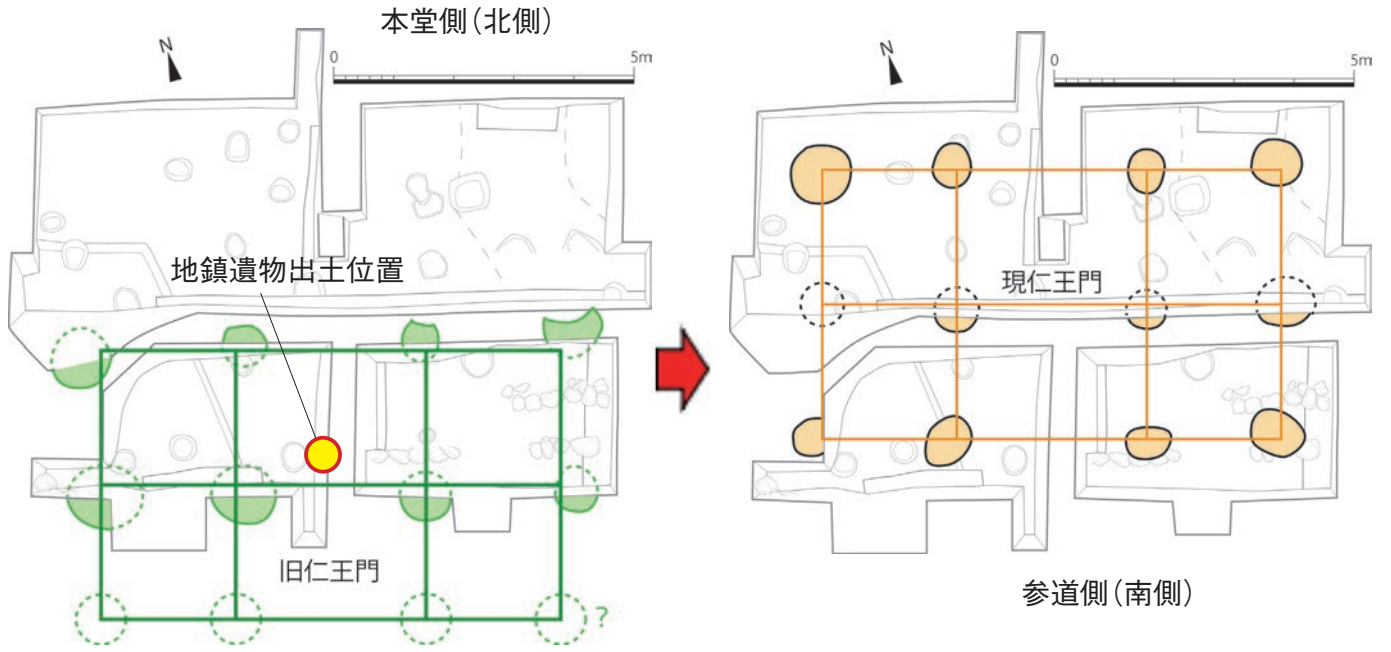
第3図 時代③ 調査区平面図



写真5 時代③ 整地層(参道か)



写真6 時代③ 基壇 1 b (北西から)



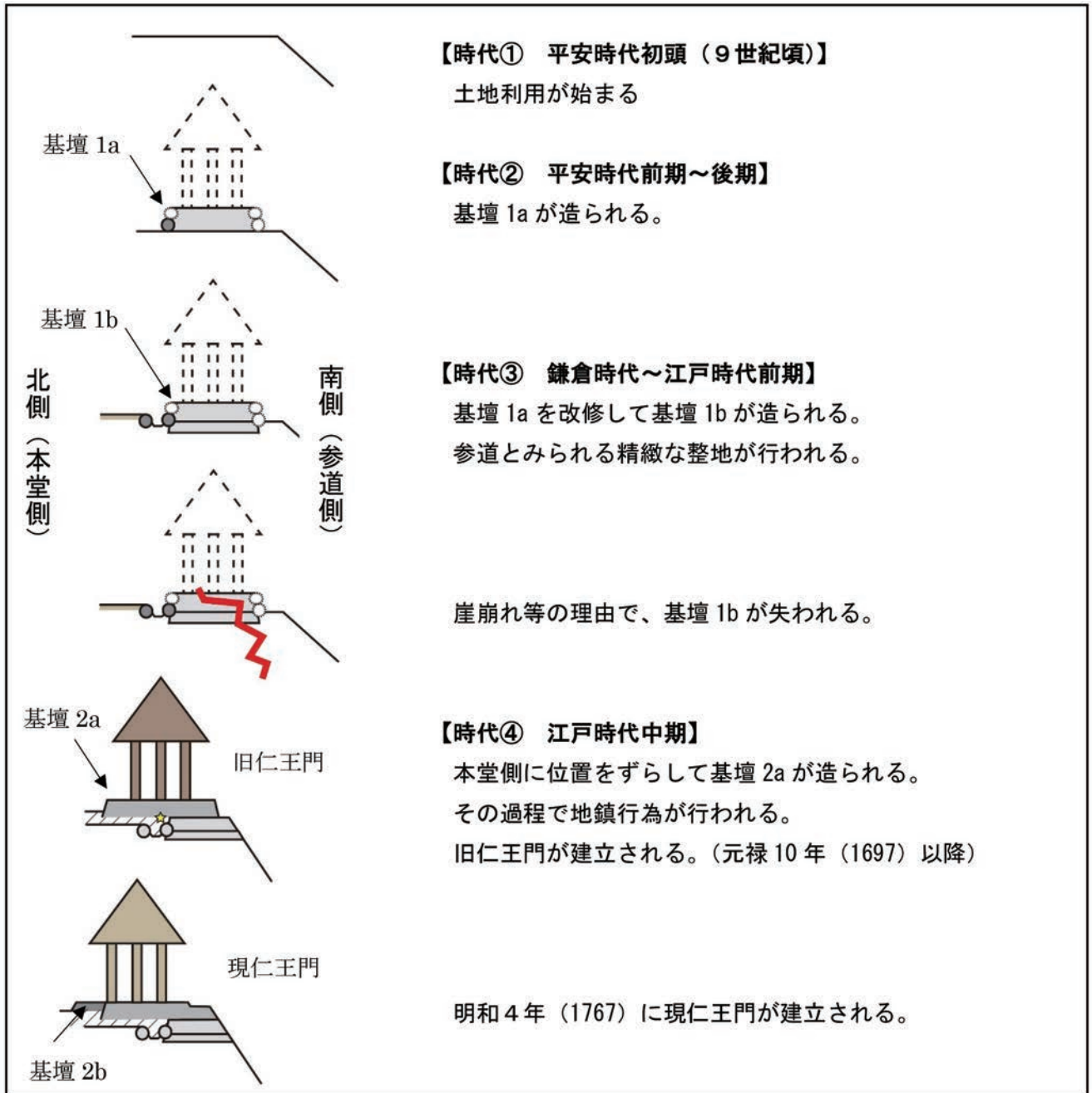
第4図 時代④ 旧仁王門・現仁王門平面図



写真7 時代④ 旧仁王門礎石抜き取り跡と現仁王門の礎石位置



写真8 地鎮遺物(土師皿、寛永通宝、元禄二朱判金、元禄豆板銀)

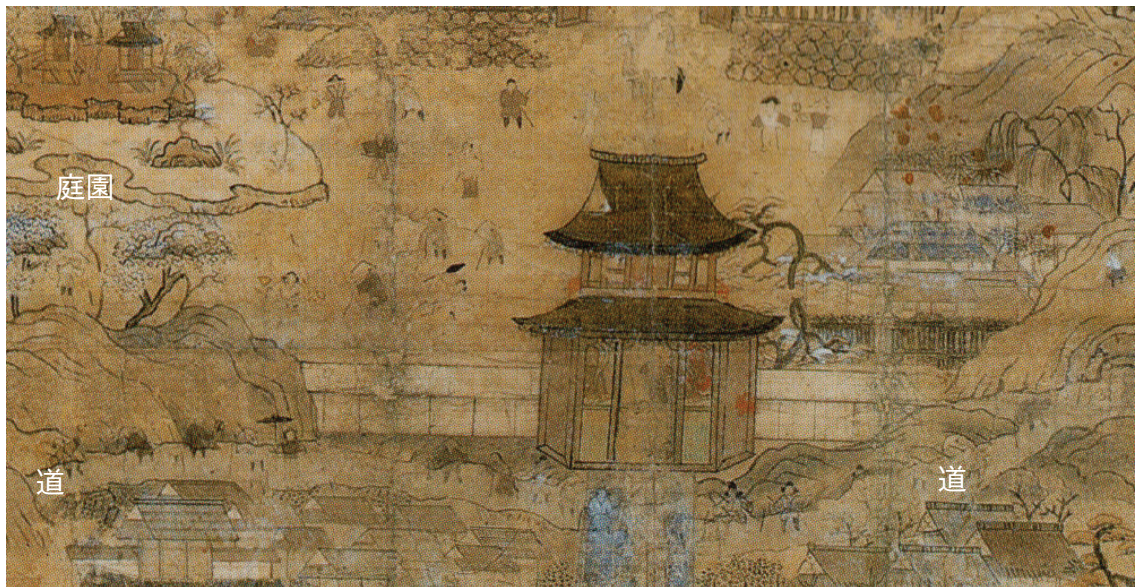


第5図 調査地の想定変遷模式図



現仁王門の南側は崖(参道階段)が迫っており、かつて基壇 1 が存在したはずのスペースは無い。すでに基壇 1 は崖崩れ等で失われた可能性がある。

写真9 現仁王門(西側から)



第6図 紙本著色 松尾寺伽藍落慶古式図(参詣曼陀羅)

Memo

A large, empty rectangular box with a thin black border, intended for writing a memo. The box occupies most of the page below the 'Memo' header.

宮津市成相寺なりあいじと丹後の中世寺院

宮津市教育委員会社会教育課

河森 一浩

1. はじめに

本発表では、宮津市府中地区に所在する成相寺旧境内の調査成果に基づいて、丹後における中世寺院成立の一様相を明らかにする。特に、考察に当たっては古代国府こくふや中世守護所しゅごの候補地である丹後府中遺跡群との関連性に着目し、丹後における中世寺院の展開や日本海交流を考えるモデルを提示したい。

2. 成相寺旧境内の調査

(1) 位置と概要

成相寺は、特別名勝・天橋立の北岸に広がる宮津市府中地区に所在し、天橋立を見下ろす成相山の標高約300から400mの中腹に位置する。真言宗の寺院で、西国三十三所霊場の第二十八番札所として信仰を集める。本堂・鐘楼・熊野権現・庫裡・山門などが建つ現在の境内(現境内地)のほか、現境内地より約70m尾根を登った地点には、寺院跡と考えられる平坦地(旧境内地)が広がり、両者をあわせて成相寺旧境内としている(第1図)。平安時代後期に成立したとされる『今昔物語集』には、卷第十六に「丹後国成合観音霊験語第四」が収録され、寺名の由来が語られている。また『梁塵秘抄』には「四方の霊験所は、伊豆の走湯、信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか、土佐の室戸門、讃岐の志度の道場」とあり、少なくとも平安時代後期には山岳霊場として全国に知られる存在であったことが窺える。

旧境内地には「古本堂」・「塔の段」と呼ばれる地名がみられる。昭和61年、「古本堂」の周辺で水道管の埋設工事が行われ、地表から約1.4mの深さから土師器・須恵器・黒色土器どきが出土した(N地点)。10世紀から11世紀と位置づけられ、平安時代に遡る「山林寺院」、「山寺」として考古学的に初めて認識された。宮津市教育委員会では、平成14年度から18年度、平成21年度から26年度に成相寺旧境内の範囲内容確認調査を行った〔河森・吉野2015〕。また、平成28年10月には旧境内地と現境内地に及ぶ342,711.81㎡の範囲が国史跡に指定された。

(2) 成相寺旧境内の変遷と画期

旧境内地、現境内地において228面の平坦面が確認された。地形的なまとまりに基づいて、便宜的にA地区からI地区に区分する(第1図)。このうち旧境内地のA地区・C地区では主要な平坦面において53ヶ所の調査区を設定し発掘調査を実施した。総調査面積は314㎡である。調査成果から4期にわたる変遷を指摘することができる〔河森・吉野2015〕。

①成相寺Ⅰ期 奈良時代後半期～平安時代中期(8世紀後半～11世紀前半)に当たる。A地区の第6トレンチにおいて奈良時代後半期の須恵器、土師器が出土する。また、平安時代中期(10世紀～11世紀前半)には、第2・6グリットや第8トレンチにおいて須恵器、土師器、灰釉陶器^{かいゆうとうき}、緑釉陶器^{りょくゆうとうき}などが出土し、A地区を中心に継続的に伽藍^{がらん}が形成されたと考えられる。

寺伝の「成相寺古記」によると、成相寺の創建は慶雲元年(704)とされている。50年程度の年代差があるが、少なくとも8世紀後半にはA地区を中心に寺院が創建された可能性がある。奈良時代の山林寺院については国分寺との関連が指摘され、僧侶の修行場として成立したと考えられている〔上原2002〕。成相寺旧境内の山麓には丹後国分寺跡が存在し、ほぼ同時期に創建したと考えられる。

この時期の山林寺院は、夏に行われる「安居^{あんご}」などの修行場と考えられ、年間を通じて山上に籠もる僧侶は存在しないという〔菊地2020など〕。平地寺院(教学)と山林寺院(実践修行)を僧侶が行き来する行動様式は、比蘇寺^{ひそでら}(奈良県吉野)を開山し、大安寺を拠点とした道璿^{どうせん}などに具体的な姿をみることができ、中国の北宗禪^{ほくしゅう}の影響が指摘されている〔伊吹2013〕。成相寺旧境内についても、成相寺Ⅰ期には遺物の出土量が少なく出土地点も限られること、奈良時代後期においては明確な遺構はみられないことから、簡易な施設であったことが考えられる。

②成相寺Ⅱ期 平安時代後期(11世紀後半～12世紀)に当たる。成相寺Ⅰ期の様相を継承して、A地区の第8・9トレンチや、第2・7グリットで土師器が出土する。特に、第8トレンチでは礎石建物^{そせきたても}が検出され(第2図)、本格的な堂宇^{どうう}の整備が認められる。また、第16グリットでも土師器、白磁^{はくじ}が出土し、遺物の出土範囲が拡大している。成相寺Ⅱ期は旧境内地において出土遺物が最も多く、成相寺旧境内の展開を考える上で重要な画期と評価できる。西国三十三所霊場となる中で、密教系の山林寺院として伽藍整備が進められた可能性がある。さらにE地区では土壙墓^{どこうぼ}が確認され、龍泉窯系青磁碗^{りゅうせんよう せいじ}や同安窯系青磁皿^{どうあんよう}の副葬がみられる(古墓10)(第3図)。時期的にはやや新しく、12世紀後半～13世紀初頭に位置づけられる。旧境内地の伽藍整備に伴って墓域が形成されたと考えられる。

ところで菊地大樹の研究によると、平安時代後期(11世紀)頃から厳冬期を含めて通年を

山上の寺院で過ごす「久住者」や「堂衆」（集団）が出現し、伽藍の整備が本格的に進められたという〔菊地2020〕。こうした視点から、成相寺の寺名の由来を伝える『今昔物語集』巻第十六の「丹後国成合観音靈驗語第四」（平安時代後期に成立）をみると興味深い。その概要は「(ア)修行僧が寺に籠もっていたが、冬は雪深く食糧が尽きてしまった。(イ)死を覚悟した僧侶は本尊（観音）に助力を念じると、寺の北西隅に傷ついた猪が倒れていた。(ウ)肉食の禁に悩みつつも猪の左右の腿をそいで鍋を食べ、命をつなぐことができた。(エ)春となり里人が寺に来ると、本尊の左右の腿が切り取られ鍋には木くずが散乱しており、僧侶は本尊が身代わりとなって助けてくれたことを悟った。(オ)木くずを本尊の腿に付けると元通りになったことから、「成り合う」（接合して元通りになるという意味）が寺の名前となった。」というものである。雪深い冬を山上で過ごす僧侶の姿が示されており、成相寺Ⅱ期における出土遺物の増加や建物跡の検出は、菊地氏が指摘する山林寺院の変質を反映する可能性がある。

③成相寺Ⅲ期 鎌倉時代から南北朝時代（13世紀～14世紀）に当たる。遺物量は減少するが、Ⅱ期の様相を継承してA地区の第8トレンチや第16グリットにおいて土師器、青磁碗、懸仏^{かけぼとけ}などが出土する。また、C地区でも第40グリット、第44トレンチで土師器や石鍋^{いしなべ}が出土し、Ⅱ期に続いて伽藍の範囲が拡大した可能性がある。さらにB地区で古墓^{こぼ}4、C地区で古墓6・7、E地区で古墓11がみられる。古墓4では人骨を伴う蔵骨容器^{ぞうこつようき}が、古墓8・11では方形の区画墓^{くかくぼ}が検出され、旧境内地に近接して墓地の形成が認められる。

④成相寺Ⅳ期 室町時代から戦国時代（15世紀～16世紀）に当たる。旧境内地において遺物量は激減し、A地区の第9トレンチで検出された土坑のほかは、明確な遺構・遺物がみられない。寺伝「成相寺古記」には、応永7年（1400）に「嶺崩れて谷と成る」とあり、旧境内地から現境内地に伽藍が移動した可能性がある。現境内地において発掘調査は実施されず検討の余地を残すが、成相寺Ⅳ期（15世紀～16世紀）における遺構、遺物の激減は、こうした可能性を裏付けている。

こうした中、B地区の古墓4、C地区の古墓8、E地区の古墓11の周辺では、Ⅳ期と考えられる石造物が検出され、墓への追善が行われていたと考えられる。また、E地区では古墓9がみられ、境内地が移動した後も墳墓の造営が継続している。

（3）成相寺旧境内と丹後の古代・中世寺院

以上、成相寺旧境内において4期の変遷を提示し、これが寺伝「成相寺古記」の記述をある程度、裏付けることを確認した。ただし、これまで丹後では、考古学的な調査が行われた山林寺院は小原山興法寺跡、縁城寺旧境内（京丹後市）、雲岩寺跡（与謝野町）と少なく、その変遷や歴史的な評価を比較検討することは困難な状況であった。こうした中、本セミ

ナーで報告された満願寺跡、松尾寺の発掘調査は、今後の研究に貴重なデータを提供することが期待されるため、ここでは山林寺院しんごんや真言・天台系てんたいの密教寺院みつきょうじいんを中心に、丹後の古代・中世寺院を概観し、今後の研究課題を整理しておきたい。

①山林寺院の出現 京丹後市域を中心に磨呂子親王の「七仏薬師伝承」や行基の開基伝承をもつ寺院がみられる。このうち行基の開基伝承は、明光寺(京丹後市)の大宝2年(702)を最古として天平年間(729~749)に集中する傾向がみられる。また、行基と関連しないケースでも興法寺こうぼうじ(京丹後市)が和同元年(708)、禅定寺ぜんじょうじ(善城寺)(京丹後市)が和同年間(708~715)、成相寺旧境内が慶雲元年(704)、松尾寺まつのおでらが和銅元年(708)と8世紀初頭の伝承をもつ例が多い。

ただし考古学的にみると、飛鳥や藤原京周辺(奈良県)では7世紀後半以降、山林寺院の存在が知られること、その全国的な展開は8世紀後半であることが指摘されており〔久保編2016〕、成相寺旧境内や松尾寺の調査も、これを裏付けている。このうち成相寺旧境内は、国分寺と関連して出現した可能性がある。また、古代の山林寺院が国境に立地するという指摘があり〔久保1999〕、丹後国と若狭国の境界に位置する松尾寺の性格を考える上で興味深い。

②天台寺院の進出 平安時代(9世紀~11世紀前半)には、宮津市域を中心に天台系寺院が出現する。如願寺(宮津市)、円隆寺(舞鶴市)は皇慶上人の創建とされている。特に、平安時代中期(10世紀~11世紀前半)には普甲寺かんいんと大谷寺むかえこう(宮津市)で寛印により迎講が実施され、縁城寺(京丹後市)においては寛印によって堂宇の再興が行われている。

上川通夫によると、撰関期せつかんき(10世紀~11世紀前半)には北宋と遼の対立を避ける外交方針が採用され、中国江南の天台山が重視されたという。こうした外交戦略は、比叡山横川を拠点とする源信、慶滋保胤らによって進められ、末法思想まっぽうしそうを背景として天台浄土教てんたいじょうどきょうの全国的な展開につながったとされている〔上川2012〕。丹後における平安時代中期(10世紀~11世紀前半)の天台僧の活動も、こうした政治的な動きと関連する公算は高いが、これまで天台系寺院の発掘調査例はなく、その実態解明は今後の課題である。

③真言寺院の再興 こうした中、平安時代後期(11世紀後半~12世紀)には、白河天皇(のちに院政を開始)によって北宋や遼の後期密教が注目され、天台浄土教の抑制と真言密教しんごんみつきょうの重視へと宗教政策の転換が図られたという〔上川2012〕。院勢力による真言僧への帰依や、熊野参詣くまのさんけいの始まりも同様の文脈で説明されている〔菊地2011〕。

ここで丹後の状況を見ると、円頓寺、笛原寺(京丹後市)、金剛院、松尾寺(舞鶴市)など真言寺院を中心に再興が図られた例がみられる。特に、金剛院や松尾寺は、白河天皇、鳥羽天皇、美福門院の崇敬を集め、縁城寺(京丹後市)では後白河院が縁起を寄進している。

真言密教を重視した院勢力の関わりが深い。さらに先述したとおり、成相寺旧境内では、この時期に本格的な伽藍整備が行われており(成相寺Ⅱ期)、松尾寺とともに西国三十三所霊場となっている。これまで山林寺院の考古学的な研究において、平安時代後期(11C後半～12C)の画期は注意されておらず見直しが必要である。

なお、鎌倉時代への連続性は必ずしも明らかではないが、建久8年(1197)、源頼朝は全国の御家人や地元有力者を集め、有力な山寺(山林寺院)で八万四千五輪宝塔の全国一斉供養を行っており、舞台となった山寺(山林寺院)は「諸国靈験の地」とされている〔上川2015〕。本セミナーで報告された満願寺跡は、建保年間(1213～19)の開基とされており、鎌倉時代に創建された山林寺院の性格を考える上で興味深い。

④小結 丹後における古代・中世寺院の展開は全国の動向とも一致する点が多い。これまで、山林寺院や天台浄土教、真言密教などの展開は、国家権力の枠外にあると考えられてきたが、近年、こうした見方は否定され〔上川2012、菊地2020〕、丹後においても院勢力の関与が想定される。こうした見通しは、山林寺院や古代・中世寺院を、官衙や荘園、集落遺跡との関連の中で位置づける必要性を喚起し、こうした研究の方向性は、本セミナーのテーマである文物交流を考える上でも有効である。以下では成相寺旧境内を、山麓に展開する宮津市府中地区の遺跡と関連づけて検討し、古代から中世への転換を跡付けてみたい。

3 丹後府中遺跡群と成相寺旧境内

成相寺旧境内が所在する宮津市府中地区には、丹後国分寺跡や丹後国一宮の籠神社、平安時代の「印鑰社」が転化したと考えられる飯役社が点在し、古代丹後国府の有力な候補地とされている。また、中世にも守護所が置かれたと考えられ、その景観は雪舟「天橋立図」(国宝)などに描かれている。宮津市教育委員会では、この地区に展開する古代・中世の遺跡を「丹後府中遺跡群」としてとらえ(第4図)、継続的に範囲内容確認調査を実施している。

国府や守護所などに関連する遺構は未発見であるが、宮津市府中地区に残される地割の変遷や、これまでの発掘調査の成果から、古代から中世にわたる歴史的展開の大枠を描くことができる。

(1) 地割と年代

宮津市府中地区においては、方位の異なる3つの地割がみられる(第4図)。

地割Aは真北を向くもので、安国寺遺跡、中野遺跡周辺に方形の地割がみられるほか、丹後国分寺跡の中門と金堂を結ぶ中軸線を延長した位置には直線道路が伸びる。丹後国分

寺跡D-1 トレンチで検出された南北方向の溝や土塁と方位が一致し、奈良時代から平安時代前期(8世紀～9世紀)に施行された可能性がある。地割Bは真北から西に22°傾くもので、宮津市府中地区を東西に貫く旧道と、これに直行する南北方向の地割からなる。中野遺跡、難波野遺跡、難波野条里制遺跡などで検出された掘立柱建物の方位と一致し、平安時代後期(11世紀後半～12世紀)に施行された可能性がある。地割Cは真北から西に35°傾くもので、これまで「難波野条里」として注目されてきた。難波野遺跡、難波野条里制遺跡で検出された掘立柱建物の方位と一致し、地割Bとほぼ同時期に施行されたと考えられる。

(2) 遺跡の消長と画期

次に、宮津市府中地区における遺跡の消長をまとめると表1のようになる。

①奈良時代から平安時代前期(8世紀～9世紀) 丹後国分寺跡、中野遺跡、安国寺遺跡などが出現する。地割Aの分布と一致して遺跡の形成がみられる。特に、中野遺跡では墨書土器(「西寺」など)や円面硯、風字硯が、安国寺遺跡では墨書土器(「国」)や30枚をこえる銅銭が出土し、国府など官衙に関連する可能性がある。奈良時代末葉から平安時代前期を主体とするが、中野遺跡、安国寺遺跡では6663型式の軒平瓦(平城京第二次大極殿)がみられ、遺跡の形成時期が奈良時代後半まで遡る可能性がある。

②平安時代中期(10世紀～11世紀前半) 成相寺旧境内で土坑が、中野遺跡で包含層がみられるほかは遺構、遺物は少なく、遺跡の形成は低調である。

③平安時代後期(11世紀後半～12世紀) 丹後国分寺跡、中野遺跡、安国寺遺跡、難波野遺跡・難波野条里制遺跡などで遺構が検出され、遺物の出土量も古代・中世を通じて最も多い。遺跡の面的な展開が認められる。また、難波野遺跡・難波野条里制遺跡では「寛治五年」(1091)銘をもつ木簡が、安国寺遺跡では「政」と書かれた墨書土器が出土し官衙的な性格が窺える。

(3) 古代から中世へ —その転換と成相寺旧境内—

丹後府中遺跡群を検討すると、平安時代中期(10世紀～11世紀前半)の停滞期を挟み、奈良時代から平安時代前期(8世紀～9世紀)、平安時代後期(11世紀後半～12世紀)に盛期がみられ官衙的な性格が認められる。

奈良時代から平安時代前期(8世紀～9世紀)には、安国寺遺跡や中野遺跡を中心に遺跡が形成される。特に、安国寺遺跡で出土した「国」と書かれた墨書土器や多量の銅銭は、日本各地の国府跡で出土する傾向があり、丹後国府を探る上で重要な調査成果である。また、これと前後して国分寺が建立されたと考えられる。宮津市府中地区が、古代丹後国の政治的な中心地として整備される中で、国分寺の僧侶の修行場として成相寺旧境内が成立したとみることができる。

平安時代後期(11世紀後半～12世紀)には、地割B・Cが新たに施行されたと考えられ、都市計画や景観の観点からも大きな画期と評価できる。特に、難波野条里制遺跡では木簡が出土し、官衙的な性格が想定されるとともに、安国寺遺跡で出土した墨書土器(「政」)は「政所」を示す可能性があり、荘園との関連が注目される。まさに古代から中世への転換期に当たり、丹後府中の都市的な再編にともなって成相寺旧境内でも伽藍整備が行われている(成相寺Ⅱ期)。

近年、堂塔^{どうとう}や院坊^{いんぼう}などからなる寺院のほか、経塚^{きょうづか}の造営や納骨信仰に注目し、「霊場」の考古学的な研究が進められている〔時枝2014〕。雪舟「天橋立図」に描かれた社寺が林立する景観は、神仏が習合^{しゅうごう}する中世的な「霊場」と評価されており〔島尾編2001、上田2007ほか〕、その成立は興味深い研究課題である。成相寺旧境内において、A地区の第8・9トレンチで検出された平安時代後期(11世紀後半～12世紀)の建物跡は、舞台形式^{らいどう}の礼堂をもつ懸造^{かけづくり}と復元でき(第2図)、その場所からは天橋立を眺望することができる〔河森・吉野2015〕。また、成相寺旧境内の様相は不明であるが、この時期には真名井神社経塚、籠神社経塚、塚ヶ谷経塚、エノク経塚、日吉神社経塚、河原山経塚の造営が知られている。これらは天橋立を囲むように展開し、天橋立や阿蘇海、宮津湾を見下ろす丘陵上に立地する例が多い。また、真名井神社経塚、籠神社経塚、日吉神社経塚や、鍵守神社の裏山に位置する河原山経塚は神社境内との結びつきが強く、神仏習合の進展を示す資料として注目される。

まさに、平安時代後期(11世紀後半～12世紀)は、中世霊場「天橋立」の成立期と評価でき、その中で成相寺旧境内が果たした役割は大きい〔河森2018〕。

4 日本海をめぐる文物交流に関する予察

最後に輸入陶磁器の分析を中心に、日本海をめぐる文物交流について予察を行う。伊野近富の集成によると丹後において輸入陶磁器が出土した遺跡として29遺跡があげられている〔伊野2015〕。また、大川遺跡、満願寺跡(舞鶴市)、中野遺跡、安国寺遺跡、丹後国分寺跡、成相寺旧境内(宮津市)などでも輸入陶磁器の出土が報告されている。

このうち輸入陶磁器の出土量が多い時期は、(1)平安時代後期(11世紀後半～12世紀前半/白磁)、(2)平安時代後期から鎌倉時代(12世紀後半～13世紀/龍泉窯系青磁、同安窯系青磁)とみられ、日本海沿岸地域において輸入陶磁器を出土する遺跡が点在することから、日本海ルートでの文物交流が指摘されている〔水澤2005〕。また、智恩寺(宮津市)には、至治2年(1322)という中国・元の年号をもつ高麗製^{こうらい}の金鼓^{こんこ}が所蔵されている。海洲の首陽山薬師寺の什物^{じゅうもつ}として鑄造^{ちゅうぞう}されたもので、対馬・壱岐を通じた日本海ルートの文化交流が

想定されている〔井上2012〕。

平安時代後期から鎌倉時代を中心として、輸入陶磁器を出土する丹後の遺跡をみると、丹後半島においては久美浜湾（別所遺跡、日光寺遺跡）、離湖（横枕遺跡）、旧竹野潟（竹野遺跡）、阿蘇海（丹後府中遺跡群）など潟湖周辺に展開する例が多い。各地の概要は以下のとおり。

①久美浜湾 別荘遺跡において平安時代末から鎌倉時代の鍛冶工房跡が検出され、同時期の白磁、青白磁、青磁が出土した。石清水八幡宮の鹿野荘が設置された時期に当たり、荘園に関係した在地有力者の集落と考えられている。また、日光寺遺跡では鎌倉時代の木棺墓が検出され、龍泉窯系の青磁碗が副葬されていた。近接して総柱建物跡が検出され「三味堂」の可能性が指摘されている。寺院との関連が注目される。

②離湖 横枕遺跡では、平安時代を中心に墨書土器や風字硯、越州窯系の青磁などが出土し、渤海使などに関わる迎賓施設と考えられている〔伊野2010〕。また、鎌倉時代には鍛冶に関連する遺物とともに龍泉窯系の青磁が出土しており、海上交通に携わった富裕層の居住地とされている。

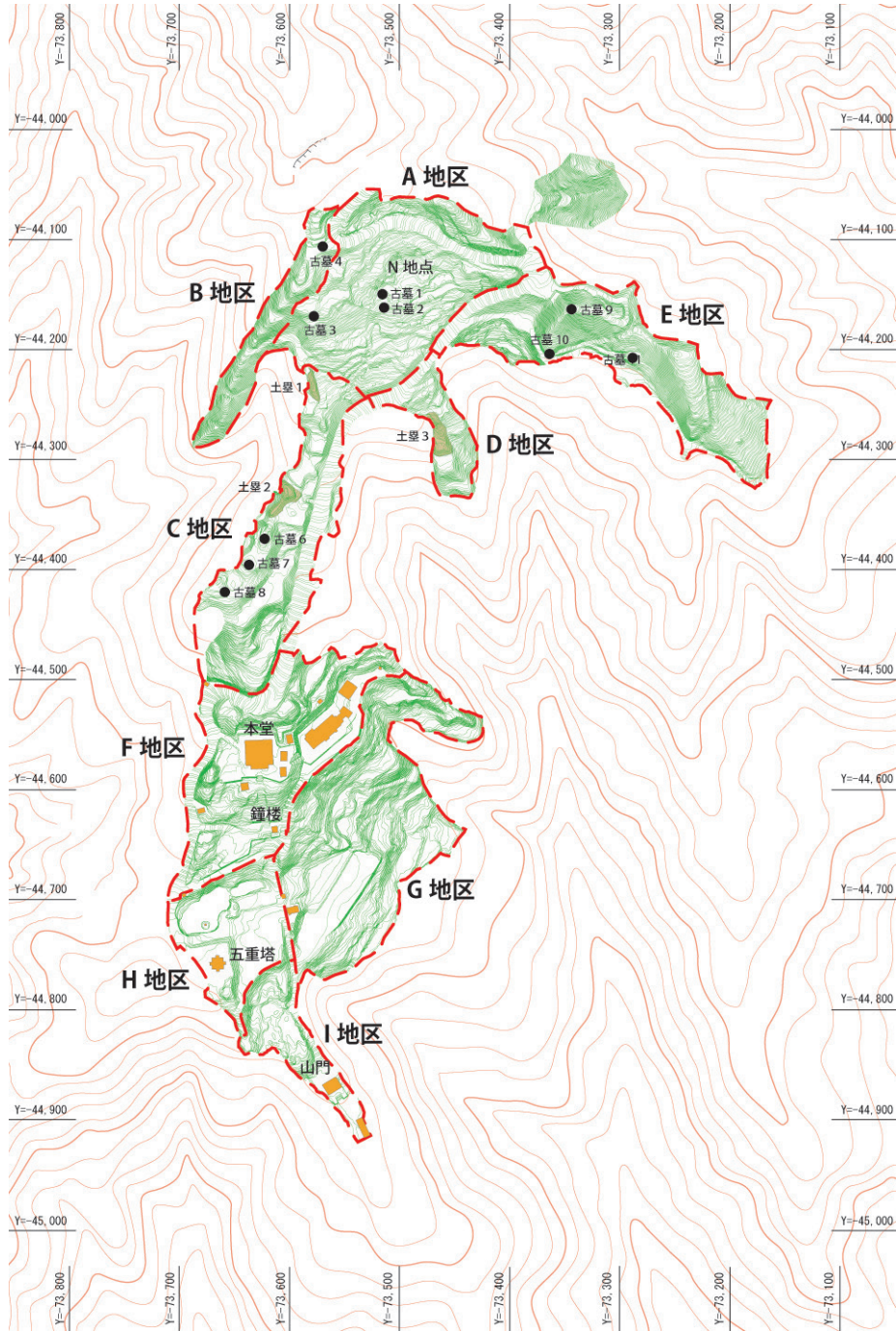
③旧竹野潟 竹野川の河口部に位置する。現在、水田となっているが、かつては潟湖が広がっていたと考えられており、これを見下ろすように神明山古墳が分布する。竹野遺跡において白磁や龍泉窯系の青磁が出土した。「福蓮寺」という小字地名がみられるとともに、地籍図に残される方形の区画から在地領主の居館の存在が指摘されている。

④阿蘇海 天橋立に囲まれた内海に当たる。中野遺跡、安国寺遺跡、難波野遺跡などで、平安時代後期を中心に多量の輸入陶磁器が出土し、丹後国府や中世守護所など丹後国の中心的な施設に関連する可能性がある〔中寫2017〕。成相寺旧境内では平安時代後期の白磁ほか、土壙墓に副葬される形で龍泉窯系、同安窯系の青磁が出土し（第3図）、丹後府中遺跡群との関連が注目される。また、丹後国分寺跡でも平安時代後期の白磁が多く、再興された14C～15C前半にも青磁が増加するという〔京都府立丹後郷土資料館2020〕。

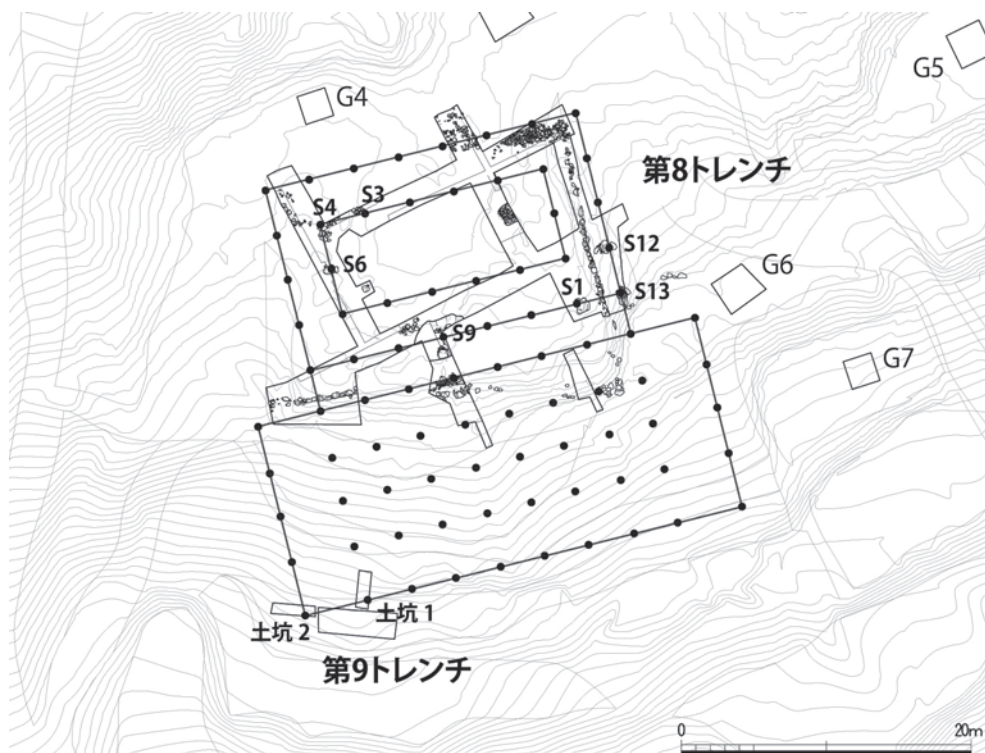
日本海沿岸では、潟湖が良好な港の役割を果たし、海上交通の拠点として機能したとされている。輸入陶磁器を出土する遺跡をみても潟湖周辺に立地する例が多く、河川を通じて内陸部への物流拠点となった可能性が高い。また、成相寺旧境内や満願寺跡などの寺院では、僧侶が文物交流に関わった可能性もあるが、輸入陶磁器を出土する遺跡には官衙や居館、荘園と多様な性格がみられる。文物交流の担い手を視野に入れて、そのルートを考える必要がある。

■参考文献■

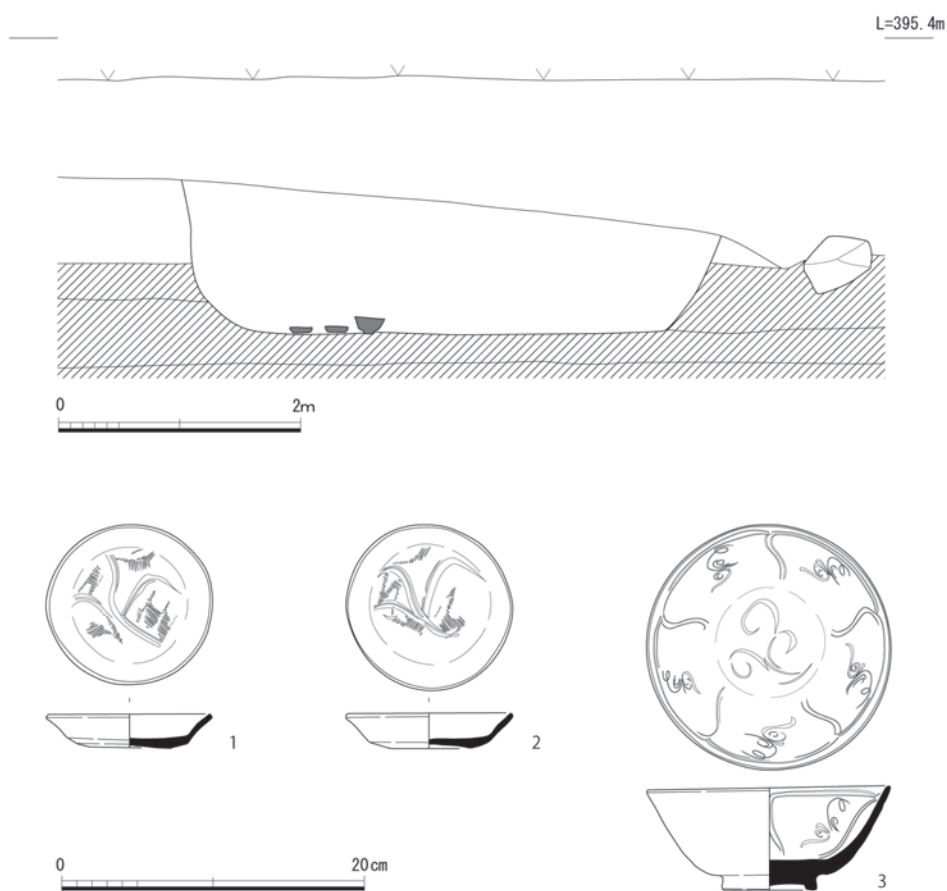
- 伊野近富2010「丹後の迎賓館」『京都府埋蔵文化財論集 第6集 創立30周年記念誌』
- 伊野近富2015「京都府内出土の輸入陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第128号
- 井上直樹2012「宮津と朝鮮半島 - 智恩寺の金鼓とその周辺 -」『丹後・宮津の街道と信仰』京都府立大学
- 伊吹 敦2013「初期禅宗と日本仏教」『東洋学論叢』38
- 上田純一2007「雪舟筆『天橋立図』に描かれた神仏の世界」『丹後地域史へのいざない』思文閣出版
- 上原真人2002「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術』265号
- 上川通夫2012『日本中世仏教と東アジア世界』塙書房
- 上川通夫2015『平安京と中世仏教 王朝権力と都市民衆』吉川弘文館
- 河森一浩・吉野健一2015『成相寺境内 宮津市市内遺跡発掘調査報告書』宮津市文化財調査報告 第43集
- 河森一浩2018「成相寺旧境内と霊場論」『太邇波考古』第40号
- 菊地大樹2011『鎌倉仏教への道』講談社
- 菊地大樹2020『日本人と山の宗教』講談社現代新書
- 京都府立丹後郷土資料館2020『天橋立と丹後国分寺跡』令和2年度開館50周年記念特別展
- 久保智康1999「国府をめぐる山林寺院の展開 - 越前・加賀の場合 -」『朝日百科 国宝と歴史の旅 3 神護寺薬師如来の世界』朝日新聞社
- 久保智康編2016『日本の古代山寺』高志書院
- 島尾新編2001『朝日百科 国宝と歴史の旅11 「天橋立図」を旅する』朝日新聞社
- 時枝 務2014『霊場の考古学』高志書院
- 水澤幸一2005「中世日本海域物流からみた地域性・境界性」『日本海域歴史大系 第3巻 中世篇』清文堂
- 中畷陽太郎2017「中野遺跡出土の貿易陶磁器と中世後期の京都産土師器 - 中世丹後府中の考古学的解明に向けて -」『陶磁器の考古学 第7巻』雄山閣



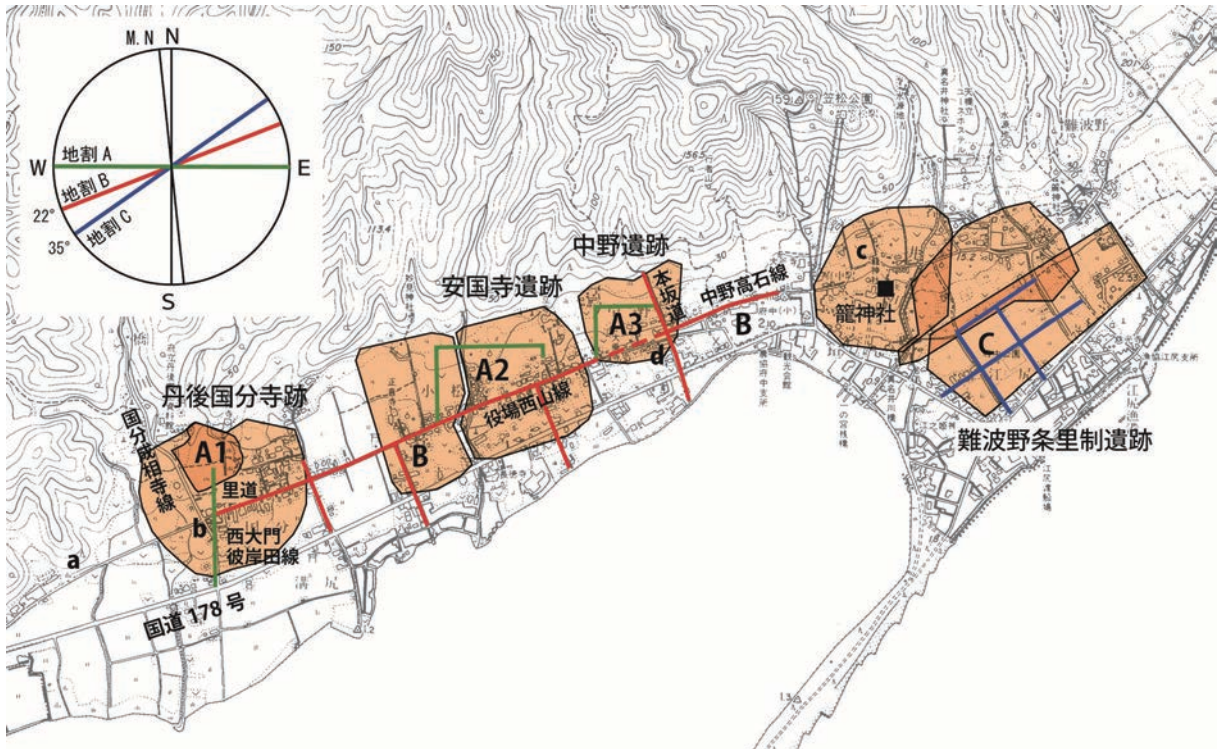
第 1 図 成相寺旧境内の測量図



第2図 第8・9トレンチにおける建物跡と復元



第3図 古墓10の遺構断面図と出土遺物



第4図 宮津市府中地区の地割と遺跡

表1 宮津市府中地区の遺跡消長

遺跡名	奈良	平安前期	平安中期		平安後期	出土品
	8C	9C	10C	11C	12C	
丹後国分寺跡	●■◆▲				■	
中野遺跡	◆▲				■◆▲	墨書土器、円面硯、風字硯、軒平瓦・平瓦 (奈良～平安前期)
安国寺遺跡	◆		?		●■▲	銅銭、墨書土器、軒平瓦
大垣遺跡・一宮遺跡					◆▲	経塚 (平安後期)
難波野遺跡・難波野条里制遺跡					●■◆	墨書土器、円面硯、風字硯 (奈良～平安前期)、木簡 (平安後期)
成相寺旧境内			◆		■	

●溝、土塁 ■建物跡、柵列 ◆井戸、土坑 ▲その他
 遺構検出 包含層



**KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER**

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。



<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189